



襷

千葉県高等学校体育連盟

専務理事 齊藤隆作

日頃から、本連盟の諸事業に対しまして、御理解・御協力を賜り厚くお礼申し上げます。

また、平成30年度の高体連各種行事が皆様のお陰で無事終了したことを心より感謝申し上げます。

さて、昨年度年末の人事異動で、山本昭裕副会長、上代真澄副会長、廣部泰紀監事をはじめ、16名の専門部長、5名の専門部・地区委員長が退任されました。そして今年度は2年目を迎えた山崎会長体制の下、各種課題への対応として副会長を1名増員して5名体制とし、専門部役員の皆様と力を合わせ、各種事業に取り組みました。

県内各種大会では、昨年末に策定した危機管理マニュアルを運用し、大きな事故も無く開催することができました。6月には本県で関東大会を6種目行い、中でもレスリング競技、少林寺拳法競技では見事地元優勝を飾ることができました。インターハイは東海ブロック4県で開催されましたが、8月上旬は名古屋や岐阜で40度を超える日が続くなど酷暑の中での大会となりました。その暑さにも負けず、今年も千葉県選手団は大活躍し、団体優勝7（過去最高タイ）個人優勝15（過去2位）入賞数121（過去最高）という素晴らしい成績を収めてくれました。また、国体においても少年種別が大活躍し、特に男子の得点は、開催県の福井に次ぐ2位という素晴らしい結果を残し、冬季インターハイでも駅伝やラグビーが好成績を収め、一年中、千葉県の高校生が輝く場面を見ることができました。これもひとえに、各専門部の役員、監督、選手が一丸となって頑張った成果だと考えます。本当にありがとうございました。

今年は「平成最後の・・・」というフレーズを良く耳にしました。もちろん県内大会、インターハイも平成としては30回目となる「平成最後の大会」でした。ちょうど30年前、私も高校生で、関東大会・インターハイを目指し、高体連マークの入った賞状をもらうために部活動を頑張っていたことが思い出されます。苦しいことや辛いことも数多くありましたが、仲間との強い絆でそれを乗り越えた時の達成感や満足感を味わえたことは今でも鮮明に思い出され、本当に多くのことを部活動から学ぶことができたと感じています。部活動はわが国の風土に根付いた素晴らしい固有の文化です。「平成」という1つの時代が終わり、新たな時代を迎えるこの節目の時に、その部活動の「在り方」が問われており、我々は時代の流れ、ニーズに合わせた部活動へと変革しながらこの文化を次の時代に繋いでいかなければなりません。

今年の箱根駅伝は東海大学が初優勝し、多くの人に感動を与えました。駅伝の魅力は何と言っても「襷」に詰まっています。その「襷」には、走る本人の思いだけではなく、チーム、歴史、伝統や「見る人」「支える人」つまり、それに関わる全ての方々の思いが加わるからこそ、より一層重みが増し、繋がることへの価値が生まれるのだと思います。

高体連活動もここまで、各専門部をはじめ、多くの関係者の御尽力により、長い歴史と伝統を繋いできましたが、そこに、今年から運動部活動充実のために、新たに「運動部活動+1（プラス1）活動」を加えました。その活動を通じて、地域、異校種や種障害者スポーツ等との連携や関わりをより一層推し進め、今まで以上に多くの方々に高体連活動への御理解・御協力をいただきたいと考えています。高体連活動という「襷」に、このような取り組みを加え、次の時代、次のステージへと「襷」を繋ぎ、新たな価値を生み出していきたいと考えています。

最後になりますが、加盟校及び専門部・地区の先生方並びに関係団体の皆様には、今後とも更なる御支援・御協力をお願い申し上げます。お礼方々、挨拶とさせていただきます。